

## 先天股脱予防に関する研究

分担研究者 (愛育研究所・小) 内藤 寿七郎  
協究協力者 (日赤医療センター・産) 雨森 良彦  
(京大・整外) 石田 勝正  
(国立小児病院・小) 今村 栄一  
(兵庫県立こども病院・整外) 香川 弘太郎  
(整肢療護園・整外) 坂口 亮  
(愛育病院・小) 沢田 啓司  
(東京大学・母子保健) 平山 宗宏  
(東京厚年金病院・産) 松山 栄吉  
(国立小児病院・整外) 村上 宝久  
(横浜南共済病院・整外) 山田 勝久  
(アイウエオ順)

### 研究目的：

先天股脱は人種により発生頻度に差があり、日本は発生頻度の高い国に属する。これは人種の差というよりも、乳児期の股関節の扱い方によるもので、新生児期、乳児期になるべく股関節に負担のかからない肢位をたもたせれば、その頻度をへらすことができると考えられる(資料1)。このためには、新生児期・乳児期の股関節の異常を早期発見するために、適切な健診システムと診断手技、診断基準が必要であり、また、新生児期、乳児期の股関節を保護するための注意を一般に普及させることが重要である。

本研究は、上記についての具体的な方法論を得ることを目的としている。

### 研究成果：

1. 先天股脱の発生頻度は、これまでの報告によれば、完全脱臼が全乳児の約3% (1.5~5%)、亜脱臼はこの約3倍、白蓋形成不完は約5倍にのぼると考えられる。(資料2)
2. 伏見、魚津、常滑などで、従来のおむつのあて方にかわる股おむつ普及につとめた結果、クリックサイン陽性率を1%以下に減らしうることがわかった。(資料3)
3. 以上のデータをふまえて、以下の各項について検討をおこなった。その概要をのべる。

#### ① 検討システムと診断基準

早期発見のために、新生児期(生後数日以内)1~2カ月、3~4カ月、6カ月、1歳の各時期に股関節の検診することが望ましい。このうち、新生児期、1~2カ月時に異常が発見された場合も、おむつのあて方に注意して、3カ月まで経過を観察することで正常化が期待できるものが多い。3~4カ月時に発見される異常は、大半がリーメンビューゲル(R・B)装着によって、起立歩行開始前に治すことが可能である。1歳は、異常を発見して、非観血的整復

が可能な最後の機会として重要である。詳細は、坂口、石田の抄録を参照されたい。検診担当者はなるべく整形外科医が行うことがのぞましいが、現状ではむづかしいので、産科医、小児科医、助産婦保健婦の検診で異常が疑われれば、なるべく早く整形外科医のもとに送ることがのぞましい。

## ② おむつ、おむつカバーについて

生後数カ月間、子どもの下肢の動きをさまたげないよう、おむつ、おむつカバー、衣服について考慮することは、先天股脱の発生を防止する上で、子どもに対する侵襲がなく、手軽に行えて効果的な方法である。このため、おむつのあて方については、股だけにおむつをあてる方法がのぞましい。おむつカバーは、股おむつに適合して、しかも子どもの下肢の動きを制限しないものがよい。このため一方法として、腰まわりの部分を細く、股はばを広くしたおむつカバーが検討された。

③ そのほか、新生児期の身長測定の際も、足をのばすとき無理な力を加えないよう、赤ちゃん体操など下肢に他動的な力を加える時、無理をしないようなどの注意が必要である。

④ 新生児検診、おむつあて方の指導などの実態をしるため、先天股脱研究会会員である整形外科医師にアンケート調査をおこなった。(雑誌「整形外科」昭和52年2月号南江堂に掲載)

## 資料 1.

# 先天股脱の予防——成因との関連——

## 1. 多種多様の成因論

先天股脱は予防が第一であるが、それは成因をよく理解しなくてはできない。ところが成因に関して昔から数え切れない諸説があって、わけがわからぬ様であった。剖検例、手術例から、寛骨臼の形成異常をはじめ、たくさんの奇形的所見が報告されているが、それが原因そのものなのか、あるいは別の原因による脱臼の二次的結果なのか、はっきりしない。それではよい予防対策がたてられるはずがなかった(先天的な奇形という解釈が多かった)

## 2. Ortolani の click test による新生児の関節弛緩性検査、von Rosen の超早期治療(予防)

スエーデンの von Rosen は、新生児期の関節弛緩性(母体から受けた大量の女性ホルモンによる)を重視し、Ortolani の click test (図1)を指標として、陽性のもの(約0.2%)は真正脱臼の前段階とみて、独自の装具(図2)で開排位に保っておく、すると3カ月後には股関節が正常化する。地域の新生児すべてにこのチェックを行った結果、要治療の脱臼例を見かけなくなった。治療から予防へと前進した一大エポックといえよう。山室は京大関連地域でこの方式を実践してすぐれた業績を挙げた von Rosen 方式には問題も多少あり、click test 陽性

でありながら何も手を加えなくても自然治癒してしまう例、また逆にclick sign 陰性とされながら後に真正脱臼に進展するものもある。前者例を捉えて治療したとしても、予防活動には overdiagnosis (病名のつけすぎ), overtreatment (余分の治療) はつきものと弁解できるが、後者の検査洩れは大きな問題である。click sign の判定法、検査の熟練度の問題もからんで(事実、新生児のclick sign 検出率は発表者によりかなりの開きがある)この方式が全面同意を得られぬ理由ともなっている。

### 3. 新生児の好む股関節屈曲、おむつの役割

京大グループで新生児検診に従事しながら石田は重大な事実を捉えた。おむつの用い方によってclick sign 陽性率に差ができる。すなわち、新生児が股関節を屈曲できないような巻きおむつを用いるところではclick sign 陽性率が高く、股屈曲が自由にできるおむつを用いさせた所では陽性率は激減する。一般に新生児は、子宮内にいたときの延長で、股関節を屈曲して、いて、時間をかけて脚を伸ばすようになる(図3)。そこへ、無理に股関節を伸展させる外力が加われば、新生児では容易に脱臼してしまう。また子供自身が自然に屈曲位に戻るのを妨げるおむつは、回復のチャンスを奪い脱臼を定着させてしまう。こうして、出生直後からのおむつの当て方が脱臼発生の頻度を大きく左右する。

先天股脱でおむつを持ち出すと、“おむつ固定”の意味で捉える人が多いが、現代の趨勢から少々のはずれである。子宮内からこの世へ生み出された子供の股関節が、環境の変化に無理なく対応してゆけるよう守るのが第一義と考えるべきである。治療や予防により以前の自然保護であると石田は強調する。コトは簡単で、新生児が好む股屈曲を妨げないおむつであればよい。着衣や抱き方などもその線に沿うようにし、身長測定や赤ちゃん体操などで脚を無理に伸ばすことは避けなくてはならない(図4)。

### 4. 成因論の見直し、先天性なる名称の再検討

難解の成因論が身近なところで解明できそうである。伸展脱臼説は名倉が早くから唱えていたが、当時先天異常の解明と、それを機械的に沿すことに狂奔した情勢の下では、それと違う方向に注目を惹くには一層強力な実証がなくてはならなかった。現代京大一派の業績は強い説得力を持ち、名倉説にも新しい光が当てられた。筆者も、3、4カ月の乳児の治療の場面で、Riemenbugelという単なるり紐だけで脱臼が苦勞なく治るのを経験しているが、その秘密はR. B. による屈曲にあるのに気づいた。3、4カ月の乳児を遅まきながら子宮内の肢位に近づけてやれば、脱臼は自然回復され治ってゆく、こちらから直接に回復しなくても、好都合の環境におけばよい結果を得ることがわかった。伸展脱臼説や、脱臼発生のカギを握るおむつの問題など一連のものとして話がよく符合する。

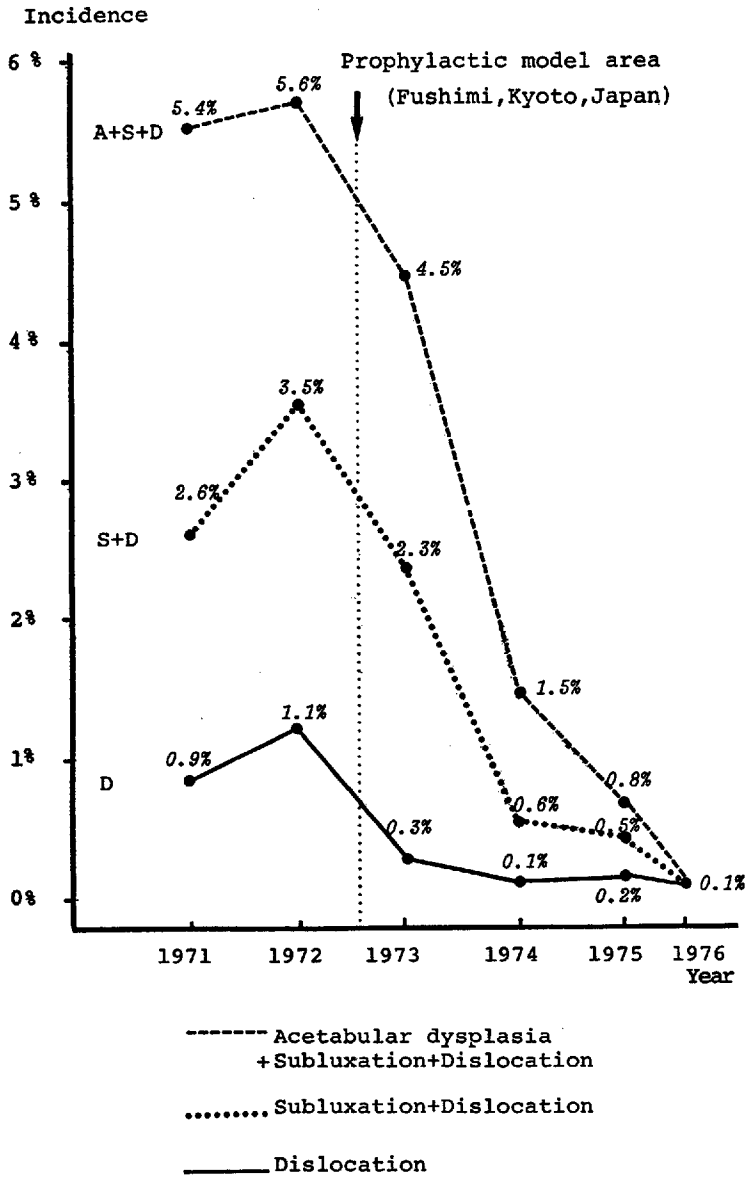
先天股脱の原因はこうしてみると、環境性、外傷性因子の比重が大きく、先天性の意味は薄れてきた。関節包内の脱臼なので、本来の外傷性とは異なるが、関節包のゆるい新生児・乳児期に特有な外傷の現われと考えるとよかろう。少なくとも、新生児の脚を無理に伸ばすような心ない操作を避けるだけで、脱臼の頻度が減る事実を注目すべきである。

(整肢療護園 坂口 亮)

資料2

乳児，先天股脱完全脱臼の頻度（垂脱臼と白蓋形成不完全を除く）

雑誌	報告者	巻	号	頁	年 度	完全脱臼 頻 度	対象数
日本公衆衛生雑誌	田中	2	4	65	1955	2.7 %	1911
" "	鈴木	4	7	358	1957	1.39	1224
" "	安藤	3	11	467	1956	4.98	1465
" "	安藤	3	11	468	1956	5.54	560
" "	白谷	3	11	465	1956	1.39	1224
公衆衛生雑誌	館野	14	6	99	1953	1.89	1054
中部整災誌	片岡	6	2	393	1963		
" "	山口	6	2	394	1963	1.81	1106
日整会誌	上田	23	2	29	1949		
" "	鈴木	26	3	153	1952		
" "	宮城	26	3	155	1952	2.59	4541
" "	赤林	32	1	9	1958	3.3	9328
" "	船橋	33	2	225	1959	3.03	1057
" "	菊野	35	10	1105	1962		
整形外科と災害外科	内村	1	1	47	1951	1.82	2418
環境医学研究所年報	上田	S22-32	32		1949		
十全医学会雑誌	真田	57	11	2077	1955	3.14	1116
九大同門会々報	川上	66		38	1952	1.48	1827
名古屋屋医学誌	館野	68	8	833	1954	1.9	1054
四国医学誌	山田	10	6	502	1957	2.1	1489
" "	加藤	15	2	324	1962		
" "	山田	18	1	47	1962	1.5	1091
" "	荻森	22	1	112	1966	1.74	3328
日本外科学会誌	荻谷	58	9		1957	2.06	727
弘前医学誌	大久本	8	4	813	1957	3.6	726
日本小児科学会誌	小林	61	8	817	1957	2.99	1371
日赤医学	大谷	12	3	229	1959	1.56	4436
" "	福岡	22	2-4	132	1970	3	847
医療	織田	11		203	1957		
" "	松田	18		279	1964	?	311
久留米医学会雑誌	副島	22	2	864	1959	0.99	1421
小児保健研究	栗原	19	1	23	1960	1.1	1718
" "	今田	16	5	227	1957		
東北整災紀要	盛	3	1-3	123	1959	1.99	2065
東海公衆衛生	白谷	總會号5		42	1959	1.63	1412
" "	吉本	" 5		42	1959	3.3	5678
北海道整災学会	高橋	6		257	1960	3.5	699
小児科臨床	青木	14	6	565	1961		
北海道公衆衛生学会	渡辺	12	抄録	31	1960		
横浜医学	金井	14	1-2	97	1964	1.55	4895
日本農村医学会雑誌	坂東	13	1	86	1965		
" "	藤堂	13	1	88	1965	2.23	2148
弘前医学誌	田原	18	1	221	1966	1.98	202
香川県医師会誌	吉峰	12	1	12	1959		
岐阜医科大紀要	安藤	8	5-2	2058	1960	3.7	3500
日本軍事新報	永井	1913		14	1960	2.8	6157
" "	辻	2116		14	1964	1.19	5192
逋信医学	森本	13	8	635	1961	1.1	736
千葉医学会	森本	37	5	353	1962	1.58	571
第14回近畿公衆衛生学会	細川	抄録		26	1975		9445



↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的:

先天股脱は人種により発生頻度に差があり,日本は発生頻度の高い国に属する。これは人種の差というよりも,乳児期の股関節の扱い方によるもので,新生児期,乳児期になるべく股関節に負担のかからない肢位をたもたせれば,その頻度をへらすことができると考えられる(資料1)。このためには,新生児期・乳児期の股関節の異常を早期発見するために,適切な健診システムと診断手技,診断基準が必要であり,また,新生児期,乳児期の股関節を保護するための注意を一般に普及させることが重要である。

本研究は,上記についての具体的な方法論を得ることを目的としている。